

HELLO PSJ

相手にわかりやすい英文を書く技術

デューク大学医療センター神経生物学部門（米国ノースカロライナ州） 西木 禎一

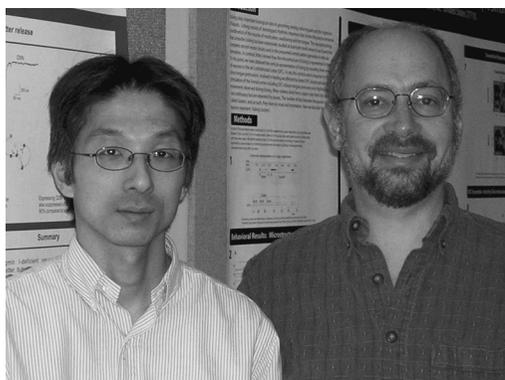
いや、ビックリしました。アメリカの小学校に通う娘が、logical thinkingとかparagraph writingを、作文の授業で習っていたんですから。とはいっても、説明文や観察文を書いているのではなく、日常生活のことがほとんどです。なのにそんな書き方をすると、味もそっけもない文章になってしまいそうですが、生徒の作文はどれも個性的でおもしろいのです。先生は、「作文で大切なのは、相手にわかりやすい文章を書くこと」と教えています。ところがなんとこれは、私がジョージ・オーガスティン教授（写真1）から学んだことと同じなのです。

READER FRIENDLY

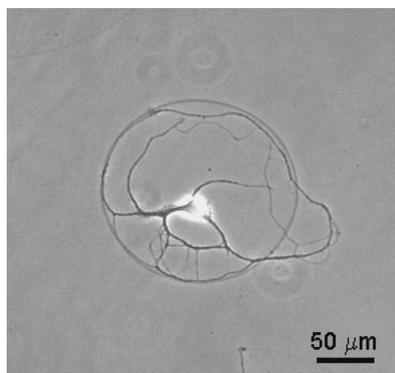
ジョージの研究室は、神経細胞間の情報伝達、いわゆるシナプス伝達を研究しています。シナプス伝達を担う伝達物質は、細胞外からのCa²⁺の

流入を感知するセンサーによって開口放出されます。このCa²⁺センサーの有力候補であるシナプトタグミンというタンパク質の機能を調べるのが、私のプロジェクトです。具体的には、シナプトタグミン欠損マウスの神経細胞（写真2）にその変異遺伝子を発現させ、シナプス伝達をパッチクランプ法で測定し伝達物質放出に対する影響を解析しています。

ここに来る前、「わかりやすい発表をする人だなあ」という印象を私はジョージに持っていました。「どうして、この人の論文や講演はわかりやすいんだろう？」ことある度に、そう思っていました。実際に彼と仕事をしてみて、その理由がわかりました。それは、読み手や聞き手にわかりやすく説明することを、いつも心がけているからです。「そのまんまやないか！」と、ツっこまれそうですが、英語が母国語だからといって簡単に



ジョージ・オーガスティン（右）と筆者（左）



マイクロドット上で培養し自己シナプスを形成させたマウス海馬神経細胞

きるわけではなく、言いたいことを正確にわかりやすく伝えるには技術がいるようです。

去年、ジョージといっしょに二報の論文を書きました。アウトライン作りから始まって、投稿直前までの一語一句におよぶ推敲、それは文章を作り上げていくという言葉がぴったりの作業でした。また、図を作る時も、その大きさや線の太さ、フォントのサイズ、そんなところにまで気をつけていたのかと思うくらい、ジョージは妥協を許しません。そんな彼は、「大事なことは、読み手に親切な論文を書くことだ」と強調し、reader friendlyという言葉をよく口にしました。

アメリカの作文教育

ちょうど最初の論文のアウトラインを書いていた頃、小学三年生の娘の教室で二枚のポスターに出くわしました。一枚は作文の書き方 (1. Planning your writing ; 2. Writing the first draft ; 3. Revising the draft ; 4. Proofreading ; そして、なんと 5. Publishing), もう一枚はわかりやすい文章を書くための六つのコツ (One clear idea, Logical organization, Personal voice, Well-chosen words, Smooth transition, Free of errors) です。その内容は、中学年向けのやさしい言葉で書かれているだけで、まさに論文の書き方そのものでした。今どきのアメリカの子供は、自分の考えや意見を相手にわかりやすく伝えるための方法を体系的に小学校から勉強しているのかと、目が点になってしまいました。

また、それらのポスターにあげる必要もないくらい、paragraph writing は基本中の基本のようです。娘はすでに、五つくらいの文にすると読みやすい paragraph になる、そして topic sentence,

supporting sentences, closing sentence の順に書くとわかりやすくなる、次の paragraph に移る時 transition に注意すると前後関係がはっきりする、ということを知っています。段落といえば、改行して一マスあけて書き始めることしか知らなかった私の小学生時代。Paragraph と段落、どちらも「ある内容について書かれたひとつのまとまり」を意味する言葉ですが、その中身はずいぶん違うようです。

このような日本とアメリカの作文教育の違いは、小学校高学年ではっきりと表れてくるようです。日本語補習校で5年生に国語を教えている先生から聞いた話なのですが、作文を見ただけで、その子がどちらの国で教育を受けたかがわかるそうです。つまり、日本から来たばかりの子の作文は、文法バッチリでも何が書きたいのかよくわからないものが多いのに対し、アメリカで writing を習っている子は、言いたいことがよくわかる文章を書くそうです。限られた時間で、多くの作文に目を通さなければならない先生の立場からすると、どちらが親切か言うまでもありません。

おわりに

投稿論文の審査を頻繁に引き受けるジョージは、よくこう言います。「良い論文には質の高いデータだけでは不十分、そこから打ち出される魅力的なモデルと、それを読者に説得するための作文技術が必要」と。英語で論理的な文章を書くための参考書をお探しの方、アメリカの小中学生向けの writing の本に少しだけ寄り道してはいかがでしょうか。相手にわかりやすい英文を書く技術の ABC を、ネイティブの子供になった感覚で学べるかもしれません。